

モスクワ版ロックオペラ

『ジーザス・クライスト=スーパースター』にみるキリスト教性

——プロテスタントの国から正教の国に渡ったエンターテイメントの解釈——

小野田 悦子

はじめに

1991年のまだ雪の残る春の日、モスクワを歩いていた筆者は街頭のポスターに視線を止めた。モスソヴェト記念劇場（Театр им. Моссовета）において『ジーザス・クライスト=スーパースター（Иисус Христос-Суперзвезда）』が上演されている。その足で劇場に向かった。1970年代によく聴いたマグダラのマリア（Mary Magdalene/ Мария Магдалина）が歌う「私はイエスがわからない（I Don't Know How To Love Him/ Как Его любить?）」を、ロシア語で聴きたかった。結果はすべての曲目において期待をはるかに超えるものであった。ロックオペラという新しい舞台芸術であるにもかかわらず、モスソヴェト記念劇場の『ジーザス・クライスト=スーパースター』¹（以下、モスクワ版と略す）には、伝統文化と宗教への敬意とこだわりがうかがわれた。またロック唱法とベルカント唱法²を巧みに使い分けるモスクワの俳優たちの歌い方は、ブロードウェイの地声だけで歌う歌唱法とは一味違う落ち着きを感じさせてくれた。

本稿では、ロックオペラ『ジーザス・クライスト=スーパースター』のモスクワ版が原作とどのように違うのか、またその理由は何にあるかをキリスト教とエンターテイメントの関係に則して検討する。まず1章で、プロテスタントの国で生まれたこのキリスト教劇が、ロシア正教の地モスクワでどのように受容されたかを論じる。次に2章で物語のあらすじを場面ごとに追って紹介し、3章から5章ではそのなかからイエス、マグダラのマリア、ユダが中心人物として登場する3つの場面を取り上げてモスクワ版の特徴を考察する。最後に、1990年代初頭にロシア正教が著しく復興した時代、機が熟したかのように舞台化された『ジーザス・クライスト=スーパースター』が、伝統的なキリスト教色を前面に出

¹ 翻訳および脚本：ヤロスラフ・ケスレル（Ярослав Кеслер）、演出：パーヴェル・ホムスキー（Павел Хомский）。

² 18世紀にイタリアで確立された発声法。中心呼吸（腹式呼吸）と同時に頭蓋骨の中に声を響かせて、体全身を楽器としてなめらかに音楽を歌い上げるテクニック。

したゆえに今日まで人々に支持されている、という筆者の見解を述べて本稿を閉じる。

1. ロックオペラとキリスト教

『ジーザス・クライスト=スーパースター (Jesus Christ Superstar)』³のブロードウェイ (以下、ニューヨーク版と略す) における初公演は、1971年だった。それまではイエス・キリストの受難を全くの人間劇として解釈することなど前例のないことであったが、この大胆な試みは「信教の自由を目的に建国され」⁴た世界で唯一の国、アメリカ合衆国においてのみ可能だったと考えられる。正教会やカトリック教会が正統的伝統として存在する文化圏においてであれば、キリスト教についての新しい解釈を表現することは、古い教会に対する意識的な反逆と受け取られるのが常である。

カトリック教会は「第二ヴァティカン公会議 (1962-1965)」⁵後の刷新によってようやく今日人々に開かれたものになったが、1960年代に作られた宗教をテーマとする映画や音楽は、まだ無難なしきたりの粋を出ないものばかりであった。キリスト教をテーマにしたミュージカルはその頃の新機軸で注目を集め、1959年にブロードウェイで初公演が行われた『サウンド・オブ・ミュージック (The Sound of Music)』が有名だが、これも伝統的な道徳に則った模範的なものである。カトリックの伝統が強い国々では、俗世間的な人間模様を描いた『ジーザス・クライスト=スーパースター』は公開当初センセーションを起こしたものの、往々にして人気は長く続くことはなかった。

東西冷戦時代のソ連がこの劇を禁じたのは反米イデオロギーが理由であったが、仮に1970-80年代にロシア正教が活発に活動していたとしたらなおのこと、伝統的キリスト教の解釈を「歪曲」したこの劇は宗教上の理由でご法度になっていたであろう。

キリスト教とロック音楽の組み合わせはアメリカ合衆国で発達した。従来アメリカのプロテスタント教会の説教で重要なのは、教義や道徳の話ではなく政治の話である。⁶ おりしも1960年代後半に生まれたロック音楽は、若者文化の主流となって政治的な情熱を盛り上げ、反権威・反体制運動の一翼を担うようになってきた。早速プロテスタント教会でもロック音楽を礼拝に用いたところが多く、キリスト教とロック音楽の組み合わせは大衆に馴染んでいた。そのような時機に、聖書やキリスト教に新しい解釈を施した音楽劇が上演されるようになり、ロックミュージカル⁷『ゴッドスペル (Godspell、1971年初演)』やこ

³ 原作・作詞：ティム・ライス (Tim Rice)、作曲：アンドリュー・ロイド・ウェバー (Andrew Lloyd Webber)。

⁴ J. バラクラフ編『図説キリスト教文化史』別宮貞徳訳、第三巻、原書房、1994年、122頁。

⁵ ヴァティカンで開かれた第21回公会議。教義面でも実践面でもカトリック教会を今日化し、外に向かつては従来のカトリック教会の態度を大きく変革するものであった。

⁶ バラクラフ、前掲書、第九部「アメリカの経験」、121-179頁。

⁷ ロックミュージカルとロックオペラの基本的な違いは、ミュージカルの俳優たちが歌って踊るのに対して、オペラでは歌手と踊り手が別である。

のロックオペラ『ジーザス・クライスト=スーパースター』は今日でもなお親しまれている。

モスクワではそれから 19 年を経て 1990 年に初演された。『ジーザス・クライスト=スーパースター』といえば西側では既にクラシックとなりつつあったこの時代でも、やはり「ロックオペラ」という新しいジャンルの音楽劇と「正教の福音書理解」と「ロシアの演劇流派の伝統」との接点を見出すのは困難な作業だったようだ。「福音書は西側の人々にとって日常の座右の書だが、ロシアの観客たちにとっては決して読みなれたものではないため、我々制作者は福音書を読み直すことから始めた」と脚本家のヤロスラフ・ケスレルは語る。⁸ 確かにソ連時代にはモスクワのような大都市で聖書が読み親しまれる習慣はあまりみられなかった。だがそのような理由からだけとはないと思われるほど、製作者たちの苦心や工夫は脚本や舞台の様々なディテールから感じられる。おそらく、原作をそのまま翻訳したのでは正教の教義と伝統にそぐわないところが多いので、脚本を見直す必要があった、という事情もあったのではないかと筆者は考える。

ちなみに、日本では「劇団四季」が 1973 年に初公演を行った。演出を手掛けた浅利慶太はキリスト教の信仰を持たず、「イエスの人間像を鮮明に感じ」てこのロックオペラを「四季」に取り入れたと言う。この劇団では母音をはっきりと発音する独特の朗唱法を用いているために、聴き取りやすい反面、歌詞に使える単語数が極端に限定されてしまう物理的な制約もあるのであろう。原作の英語を意識しただけと思われるような「四季」版の歌詞からは、残念ながら宗教的に考察できる点が見出せなかった。

2. 物語の展開

物語は、約 2000 年前のパレスチナにおいて、一週間後に十字架にかかることを承知しているイエスと彼を取り巻く人々それぞれの心情を描いたものである。パレスチナはローマ帝国の統治下にあり、ローマ総督ピラトと神殿を司る大祭司カヤファやアンナス一族の二重の支配を受けている。さらにガリラヤ地方はヘロデ分王の領地で、人々は搾取され貧困と病気に苦しみ、彼らの反ローマ感情は頂点に達していた。そこに登場したのがイエスである。

ニューヨーク版、モスクワ版でプロットは共通しているが、ここではモスクワ版の脚本に基づいて物語の展開を追ってみる。

第一幕

1 場 序曲/ Overture/ Увертюра

全般の紹介として、各場面のテーマ音楽のイントロが流れ、それに合わせてそれぞ

⁸ モスソヴェト記念劇場プログラム、1991 年。

れの登場人物が舞台の袖から次々と現れて演技を披露する。

2場 プロローグ/ — / Пролог

イエスが故郷のガリラヤ湖畔の山上にて教えを説く。原作には無い場面で、これについて次章にて述べる。

3場 彼らの心は天国に/ Heaven on Their Minds/ Небом головы полны

イエスの右腕として忠誠を誓ってきたユダは、イエスと自分の死が近づいていることを予感して苦悩する。「イエスよ、私の忠告に耳を傾けて欲しい。群衆はあなたの虜になって酔っているが、あなたはスターにされた拳句に罵られ殺されてしまうでしょう。目を覚まして正気になってください。人々の幸せを思うなら、どうか死なないでください」。

4場 何がおこるのですか/ What's the Buzz?/ Что за шум?

金曜日、ベタニアにて。イエスには自分の運命が見えているが、弟子たちは何も理解できず世俗的な話題で騒ぐ。マグダラのマリアがイエスの落胆を知って慰めようとするが、潔癖なユダには女性がイエスに近づくことすら許せない。「イエスよ、私は『男』としてあなたを理解できます。でも『預言者』として信じている群衆を裏切ることになります」。イエスがユダをたしなめる。「彼女を責めるのをやめなさい。もしあなたに全く罪が無いなら、彼女に石を投げつけなさい」⁹。

5場 今宵やすらかに/ Everything's Alright/ Колыбельная Магдалины

自分の死を思って孤独に陥っているイエスをマリアが歌いながら癒す。「眠ればすべての苦しみは遠のきます。明日のことに思い煩わずに¹⁰お休みください」。ユダは、貧しい人々が溢れているのにイエス一人に高価な香油を使うマリアを責めるが¹¹、イエスはマリアを庇う。「大勢の飢えた人々、不幸な人々はいつの世にも存在するのだ」¹²。

6場 忘却/ — / Забвение

原作には無い場面である。群衆はイエスを救い主だと信じ込み、ローマの圧制からの解放者だと奉り結集する。熱心党のシモンはその群衆を利用して反ローマ武装蜂起を企てる。ユダは、シモンの急進さが群衆の憎悪を焚きつけてイエスを死に追いやると言って非難するが、シモンはユダを臆病者と言い返して口論する。突然、不協和音

⁹ ヨハネ 8:7。

¹⁰ マタイ 6:34、ただしこれはイエスの言葉である。

¹¹ マタイ 26:7-11/ マルコ 14:3-7/ ヨハネ 12:4-5。

¹² 申命記 15:11。

が鳴り響くとユダが「忘却だ (забвение)」と叫んで苦しみ出す。

7 場 イエスは死すべし/ *Jesus Must Die*/ Заговор Каяфы

エルサレムのカヤファ邸にて。神殿を司る大祭司カヤファ、義父アンナス、司祭たちはローマ帝国と手を組んで為政者の地位を保っているが、イエスが群衆から熱狂的に支持されれば自分たちの立場を危うくすると案じて、イエスを葬る決議をする。「『過ぎ越し』祭りの前のこの騒ぎは我々にとって致命的だ。イエスの人気は我々の身を滅ぼす。一気に死刑だ。「死刑だ」、「死刑だ」。

8 場 ホザンナ/ *Hozanna*/ Осанна

日曜日、エルサレム¹³の街中で。群衆はイエスを狂喜して迎え入れ、イエスこそ自分たちのリーダー、救い主と褒め称える。大祭司カヤファたちはいよいよ不安に陥る。ユダはイエスの身の危険を察して群衆を落ち着かせようとするが、反対にシモンは「今こそローマ占領軍を追い出すチャンスだ」と群衆に決起を促す。

9 場 ピラトの夢/ *Pilate's Dream*/ Сон Пилата

月曜日、エルサレムのピラトの別邸にて。ローマの総督ピラトは夢を見る。一人の男が門番に連れ込まれ地面に押し倒される。彼は何を訊いても沈黙し、死を宣告されても悲しそうな眼を一瞬ピラトに向けただけで、まるでパレードのような騒ぎのなかで殺された。

10 場 イエスの神殿/ *The Temple*/ Изгнание из храма

エルサレムの神殿は荒廃して商売の場となっている。「祈りの家」¹⁴を汚して「強盗の巣」としていると言って激怒したイエスは、商品を投げ散らし商売人たちを追い出す¹⁵。呆然と立つイエスのまわりに飢えや病気に苦しむ群衆が押しかけてイエスに触れて奇跡による助けを懇願する。

11 場 私はイエスがわからない/ *I Don't Know How To Love Him*/ Как Его любить?

原作ではマグダラのマリアがイエスに膝枕をして寝かせ、恋心を一人で歌う。モスクワ版ではマリアが自分の力ではどうにもできない力が働いていることを感じて、イエスを愛することの難しさを一人で歌った後、離れたところに立つイエスと互いの

¹³ 出エジプト以来、神はユダヤ民族がひとつの町を選びそこに住むと約束した。イスラエル第2代王ダビデはエルサレムを都にして統一王国を確立した。後にイスラエルが存亡の危機に瀕したら、神が再び救済者を遣わしてイスラエルを救うという期待を人々が持っていた。

¹⁴ イザヤ書 56:7。

¹⁵ マタイ 21:12, 13/ ルカ 19:45, 46/ ヨハネ 1:13-16。

想いを歌によって交わす。第4章にてニューヨーク版とモスクワ版の歌詞を比較検討する。

12 場 裏切り/ Dammed for All Time/ Предательство Иуды

火曜日。自分を「神の子」だと断言するイエスと、イエスを「救い主」と祭り上げる群衆とを説得できずに疲れ果てたユダは、イエスが死なずにすむように必死の行動に出る。ユダは大祭司カヤファを訪れて懇願する。「賢者よ、私の穢れを取り除いて欲しい。私をこんな役から降ろして欲しい。あなた方は敵ではなく私たちと同胞ではないか」。しかしカヤファたちはユダを追い詰める。「言い訳するな。我々は法を知り尽くしている。イエスと我々のどちらに付く気なのだ。『品』はどこで手に入るのか教えなさい」。ユダは泣きながら答える。「木曜日の夜中。ゲッセマネの園。弟子たちから離れて […]」。ここで第一幕目が閉じる。

第2幕

1 場 最後の晩餐/ The Last Supper/ Тайная вечеря

木曜日の晩。一同が食事をしているとき、イエスは自らパンを割って弟子たちに与えた。「これは私のからだである」。そしてワインを注ぎ弟子たちに勧めた。「これは多くの人のために流される私の血である。パンとワインで私のことを思い出すように」¹⁶。楽しんでいた弟子たちは、自分たちの中にイエスを裏切る者と見捨てる者がいると言われて驚くが、ユダはイエスに問いただす。「それは私のことですか」。「誰のことかはあなたのほうがよく知っているのでは」。

2 場 ゲッセマネの園/ Gethsemane/ Гефсиманский сад

食事のあとイエスは弟子のペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れてオリーブ山の麓のゲッセマネに祈りに出かけて、弟子たちから少し離れて一人で神に問いかけて煩悶する。¹⁷「私はあなたに身も心も捧げたけれど、疲れ果てました。これ以上何をお望みなのですか。どうして私が死ぬのですか。死を目指して生きてきたではありません。この死が無駄ではないことを教えてください。あなたの叡智を示してください。いいでしょう、杯を飲みましょう。私の死に様を見てください。十字架にかけてください。私の心が変わらない今のうちに」。

3 場 逮捕/ The Arrest/ Арест

イエスが一人でいるといころにユダの手引きで兵士たちが園に現れる。騒がしさに

¹⁶ マタイ 26:26-29/ マルコ 14:22-24/ ルカ 22:19-20/ I コリント 11:23-25。

¹⁷ マタイ 26:36-38/ マルコ 14:32-36/ ルカ 22:39-45/ ヨハネ 18:1。

弟子たちが目を覚まして剣を取ってイエスを取り戻そうとする。「剣を収めなさい。¹⁸あなたたちと別れる時が来た。でもたった3日間のことだ」。カヤファ邸では捕らえられたイエスに向かって群衆が罵倒の言葉を浴びせる。「自分の最期を予言できなかったのか」、「奇跡を起こしたらどうだ」、「救いは無かったではないか」、「黙っていないで答えてくれ」、「イエスをピラトの裁判へ」、「死刑にしろ」、「磔にしろ」。

4場 ピラトとカヤファ/ — / Пираг и Каяфа

原作には無い場面。金曜日の明け方、ローマ総督ピラトの元にイエスが連れてこられる。ピラトは先日夢に現れた人物と対面して驚く。大祭司カヤファはイエスこそローマの敵だと訴えるが、ピラトはイエスを罰する理由を見出せない。カヤファはピラトの煮え切らない態度に苛立ち、ローマ皇帝に直訴すると脅して事勿れ主義のピラトを追い詰める。

5場 ピラトとキリスト/Pilate and Christ/ Пираг и Иисус

ピラトはイエスに数々の質問をするが、天の国など理解できないピラトにはイエスの答えは難解で埒が開かない。自分の手には負えないため、イエスの出身地であるガリラヤの領主ヘロデの元へ彼を送る。

6場 ピラトとマグダラのマリア/ — / Пираг и Магдалина

原作には無い場面。マグダラのマリアはイエスの死を思い毒の杯を飲み干し、ピラトに訴える。「自分の命を懸けて一つだけお願い事があります。イエスを助けてください。汚れない魂を滅ぼさないでください。汚れない血を流さないでください。他人の罪を贖うことが犯罪だと仰るのですか。私を磔にしてイエスを救ってください」。ピラトは同情を示すものの、「イエス自身が死を求めているのに私がどう助けるのだ。それに、扇動者を赦したらローマ皇帝が私を罷免する。しかし彼が同じ民から裁かれるとは気の毒に……」。

7場 ヘロデ王の歌/ King Herod's Song/ У царя Ирода

ガリラヤ地方の領主ヘロデは、実権をローマ総督ピラトに奪われてから政治に興味を失いこの世の快樂に溺れている。ヘロデは自分の前に連れてこられたイエスを「奇跡師」として興味津々で迎える。しかしイエスが沈黙を保ったまま、奇跡を起こさないし踊り子たちにも興味を示さないので、嘲笑して彼を追い返す。

8場 ユダの死/ Juda's Death/ Смерть Иуды

ユダは自責の念に苛まされる。「なぜこんな運命なのですか。誰の悪意なのですか。

¹⁸ マタイ 26:52/ ルカ 22:51/ ヨハネ 18:11。

彼は神ではありません、彼は人間です。彼は一番親しい兄弟だったのに、一番優しくかったのに、私は彼を死に追いやってしまった。どうしたら彼を取り戻せますか。どうしたら許してくれますか。神よ、なぜ私を選んだのですか。なぜ私を死なせるのですか」。ユダは縄に手を掛けながら地の底に沈んでいく。第5章でも述べる。

9 場 ピラトの裁判/ Trial Before Pilate/ Суд Пирага

イエスは再びピラトの前へ引き出される。群衆はますます興奮してイエスの死を叫ぶ。ピラトはイエスに問い続ける。「群衆に見捨てられ、押しつぶされ、こんな運命を望んでいたのか。答えなさい、預言者よ、あなたの王国はどこにある。あなたは王ではないのか。あなたの力とは、栄光とはどういうことだ。真実とは何か」。イエスは平然と答える。「この世に私の王国は無い。法はひとつ、世界を支配しているのはあなたでも私でもない、『彼』である」。イエスは、自分を裁けるのは神のみだと言ってピラトの情状酌量を拒む。ピラトは遂に「それほど望むなら死ぬがよい」とイエスに死刑を宣告する。¹⁹ イエスは十字架にかけられて息を引き取る。

10 場 スーパースター/ Superstar/ Сверхзвезда

時は現在で、死んだはずのユダが復活してロックンロール調で歌う。「いつもこの目で見ていないのに理解できない、ひとつしかない物をどうして全ての人に分け与えられるのか。ブッダ、マホメット、預言者エリヤ、キリスト、誰が一番高いところに登ったのか。山を動かさせたのか。広告のための企画だったのか、それとも自分たちで立てた壮大な企画だったのか、あるいは空飛ぶ円盤からの命令だったのか。本当のところを教えて欲しい」。

11 場 ヨハネ伝 19 章 41 節/ John Nineteen: Forty-One/ Эпилог

「イエスが十字架に付けられた所には園があった。その園には、だれもまだ葬られたことのない新しい墓があった」²⁰。

モスクワ版ではイエスとユダが皮のジャンパーとジーンズを着用してバイクで駆ける。マグダラのマリアも現代的ないでたちで現れ、イエスのバイクの後部座席に同乗して、3人は仲良く舞台の袖へ走り去っていく。閉幕。

¹⁹ 四福音書では総督ピラトは群衆の要求で「仕方なく」磔刑にしたとなっているが、モスクワ版では明確にイエスに死刑を宣告している。これは正教会のローマに対する見解を表していると、筆者は理解している。

²⁰ 『新約聖書』フランシスコ会聖書研究所訳注、サンパウロ、2004年。数ある日本語の『新約聖書』の中から「フランシスコ会」版を選んだ理由は、日本語のわかりやすさと注の豊富さにある。

3. イエスの福音「山上の垂訓」

「幸いなるかな、心の貧しき人」²¹で始まる「山上の垂訓 (The Sermon on the Mount)」は 8 つの至福 (八福) と呼ばれ、その内容はキリスト教の黄金律と言われるように、福音の根幹をなす。

モスクワ版の舞台では、序曲の激しい展開が一通り過ぎると場は水を打ったように静まりかえり、高台の上でスポットライトを浴びたイエスがたたずんで「山上の垂訓」を詠唱する。これは原作のニューヨーク版には無いエピソードである。この始まり方を見ただけで、モスクワ版はキリスト教の劇であることを前面に出していることが感じられる。原作のストーリーはイエスの生前最後の 7 日間における彼の「人間としての」苦しみを主題に据えているのに対して、モスクワ版はイエスが「神の子」であり同時に「人の子」であるという²²、あくまで教義の範囲で彼の心が揺れ動く苦悩を描いている。そのために時間設定を「エルサレム入城」²³後に限定せず、イエスの公的活動の初期に遡って彼の故郷であるガリラヤ地方での一場をモスクワ版で独自に設定している。

自分の貧しさを知る人は幸いである、天の国はその人のものだからである。

悲しむ人は幸いである、その人は慰められるであろう。

柔和な人は幸いである、その人は地を受け継ぐであろう。

義に飢えかわく人は幸いである、その人は満たされるであろう。

あわれみ深い人は幸いである、その人はあわれみを受けるであろう。

心の清い人は幸いである、その人は神を見るであろう。

平和をもたらす人は幸いである、その人は神の子と呼ばれるであろう。

義のために迫害される人は幸いである、天の国はその人のものだからである。

(マタイ 5 章 3-10 節²⁴)

「山上の垂訓」の場面は、イエスが公的活動を始めて大勢の弟子たちに囲まれるようになった頃、ガリラヤ湖のほとりで説いた教えである。ルカの福音書 6 章 17-49 節では「平らな所」で行われたとあるが、マタイの福音書 5 章から 7 章において「山上」で行われたとあり、キリスト教文化圏では伝統的に「山上の垂訓」という呼称で親しまれてきた。

²¹ カトリック聖歌 605 番「さいわいなるかな (真福八端)」の出だし部分。

²² 451 年のカルケドン公会議 (正教ではハルキドン全地公会) において、イエス・キリストは「真の神であり、真の人間」であり、「神性において父と同一本質の者であり、かつまた人性において我々と同一本質の者」であることなどが宣言された。

²³ イエスが公的活動の最後にガリラヤ地方からエルサレムにのぼり、神殿のある城壁内に入る場面 (マルコ 11:1-11/ マタイ 21:1-11/ ルカ 19:28-40/ ヨハネ 12:12-19)。

²⁴ 前掲『新約聖書』。

4. マグダラのマリアのアリア「私はイエスがわからない」

第1幕11場（モスクワ版では12場）のこの歌は、主題歌の「スーパースター（Superstar/Сверхзвезда）」と並んで独立したスタンダード・ナンバーとなり歌い継がれている名曲である。

ニューヨーク版“*I Don't Know How To Love Him*”（邦題「私はイエスがわからない」）では、「人間の女性」であるマグダラのマリアが「人間の男性」としてのイエスを恋い慕い、思いの丈を叫ぶ。「私は…」 「私は…」と終始一貫して自己中心的な内容にキリスト教の教えとの違和感を覚えるが、1970年代の女性解放運動の広がりを中心に、これはこれなりに人々の共感を得て世界各国で流行した。

まずニューヨーク版の歌詞を読んでみたい。オリジナル・ブロードウェイ・キャスト盤より第1幕11場の“*I Don't Know How To Love Him*”をMCAレコード社のCD解説書より抜粋する。

I Don't Know How To Love Him (私はイエスがわからない)

作詞 Tim Rice、対訳 本田浩子

マリアの独唱

I don't know how to love him	あの方をどう愛したらよいかしら
What to do how to move him	あの方の心はどうしたら動かせるのでしょうか
I've been changed yes really changed	私は変わってしまった、すっかり変わってしまった
In these past few days when I've seen myself	この数日間で、私は別人のように
I seem like someone else	変わってしまった
I don't know how to take this	どうしてなのかしら
I don't see why he moves me	なぜ、あの方は私の心を動かすのでしょうか
He's a man he's just a man	彼は男—まったく普通の男
And I've had so many men before	私はいろいろな面から
In very many ways	多くの男を見てきた
He's just one more	彼もその一人にすぎない
Should I bring him down	彼を破滅させてしまおうか
Should I scream and shout	金切り声で叫ぼうか
Should I speak of love let my feelings out	溢れるこの思いを言ってしまうのかしら
I never thought I'd come to this	私がおんなの気持ちになるとは思わなかった
- what's it all about	一体どうしたことかしら

Don't you think it's rather funny	こんな気持ちになるなんて
I should be in this position	なんともおかしいことだわ
I'm the one who's always been	私は今までどんな時にも
So calm so cool, no lover's fool	愛に溺れることなく
Running every show	冷静だったのに
He scares me so	だから、あの方が恐ろしい
I never thought I'd come to this	私がこんな気持ちになるとは思わなかった
- what's it all about	一体どうしたことかしら
Yet if he said he loved me	でももしあの方から愛しているといわれたら
I'd be lost, I'd be frightened	私は自分を見失い、怯えるでしょう
I couldn't cope, just couldn't cope	抵抗できないわ、とても抵抗できないわ
I'd turn my head I'd back away	後ろを向いて、逃げるわ
I wouldn't want to know	知りたくないわ
He scares me so	だから、あの方が恐ろしい
I want him so, I love him so	あの方が好きよ、あの方を愛しているわ

英語の歌詞から一目瞭然であるのは、“I”という主語が圧倒的に多いことである。ニューヨーク版におけるマグダラのマリアは、自分の経験で知り得た男性の範疇で「彼もその一人にすぎない」と言い切ってそれ以上はイエスを理解しようとしなない。彼女はイエスという人知を超えた存在に出会ってもなお、自分がなぜ「別人のように変わってしまった」のかわからず、幼児のように感情をあからさまにするばかりである。

正教におけるマグダラの「聖」マリアについての位置づけは後述するが、カトリックの聖書学でも教父アウグスティヌスが言ったようにマグダラのマリアは「使徒のなかの使徒」である²⁵。正教でもカトリックでも「聖人」であるマグダラのマリアが、師イエスのことを「彼は男—全く普通の男」と考えることはできたであろうか。

さてモスクワ版の同じ場面では、メロディーこそ原作どおりであるが歌詞については全く原型を留めていない。マグダラのマリアはイエスへの切ない想いを吐露するばかりでなく、イエスが単なる「この世の男性」ではないことを察して彼の生きる世界を理解したいと天に問い続ける。マリアが崖の上でこの独唱を終える頃、別の崖の上にイエスが登場する。その様は二人の間に越えられない谷が横たわっているかのようである。

ここからのイエスとマリアの掛け合いの場面も、原作には無かったモスクワ版のオリジ

²⁵ 松本富士男、石原綱成「マグダラのマリアの図像学的考察」『キリスト教史学』第50集、1996年、i-xxxix頁。荒井献「引喩としてのマグダラのマリア」『新約聖書とグノーシス主義』岩波書店、1986年、303-344頁。

ナルである。この後半部で、二人はそれぞれの台詞を歌いながら、同じタイミングで同じ言葉を共鳴させる箇所がいくつかある。まるで二人の互いへの想いが時々通じ合うかのようだ。音声を使用してお伝えできないのが残念であるが、アンダーラインを施した部分がそれである。劇場の観客席でこの響きを聴いた瞬間、凄まじい迫力で五感を総動員させられて暫く心の琴線が触れ止まなかった。

КАК ЕГО ЛЮБИТЬ (私はイエスがわからない)

詞 Ярослав Кеслер、訳 小野田悦子²⁶

マリアの独唱

За что мне эта доля,
или чья злая воля
надо мной царит, как ночь?
И никто мне не в силах помочь
найти его любовь.

何故こんな運命なのでしょう
それとも誰の悪意でしょうか
暗闇のように私にのしかかるのは。
誰も私を助けてくれません
彼の愛を見つけないのに。

Я с ним искала счастья,
только он не подвластен
среди всех моих мужчин.
Лишь один он, лишь он один
так добр и нежен был,
но он не любил.

彼との幸せを探したけれど
彼だけは私の思い通りにできません
今まで出会った男性たちと違って。
彼だけは、ひとり彼だけは
あんなに優しく慈しんでくれたのに
愛してはくれなかったのです。

Как его найти?
Как его вернуть?
Как сказать “прости”?
Как сказать “забуди”?
Я не знаю, как мне быть,
как его любить.

どうしたら彼を見つけられるの？
どうしたら彼を取り戻せるの？
どんな風に「ごめんなさい」と言おう？
どんな風に「忘れて」と言おう？
私はどうしたらいいの？
彼をどう愛したらいいの？

Я с ним искала счастья,
только он не подвластен
среди всех моих мужчин.
Лишь один он, лишь он один
так добр и нежен был,
но он не любил.

彼との幸せを探したけれど
彼だけは私の思い通りにできません
今まで出会った男性たちと違って。
彼だけは、ひとり彼だけは
あんなに誠実で優しくかったのに
愛してはくれなかったのです。

²⁶ 詞は筆者自身が音声 (CD) から起こして訳したので、誤りがあれば筆者の責任である。

——以下はモスクワ版のオリジナル——

マリア

Я не знаю, как мне быть,

私はどうしたらいいのですか？

как его любить.

彼をどう愛したらいいのですか？

За что мне эта доля,

何故こんな運命なのでしょう、

иль чья злая

それとも誰の悪意でしょうか、

воля надо мной царит, как ночь.

暗闇のように私にのしかかるのは。

И никто не

誰も助けてくれません

в силах помочь

彼の愛を見つけたいのに、

найти его любовь, найти любовь.

愛を見つけたいのに。

Ведь ты открыл мне мир

あなたは私に教えてくれた

душевной красоты,

心の美の世界を。

イエス

Путь начертан мой

私の道は定まっています

в звездной вышине,

天のいと高きところに、

но любви земной

でも地上の恋愛は

не осталось мне.

私には無かったことです。

Я не знаю, как мне быть.

私はどうしたらいいのですか？

Простые радости земные

私にはこの世の素朴な喜びを

мне не суждено их испытать.

味わうことは許されない。

Царит незримо надо мной высшая власть,

眼に見えず私を支配しているのは

天上の力、

всесильная власть.

絶大な力。

Нет, не дано связать

無理なのです、

здесь на земле

この地上で

волю бога и любовь.

神の愛と恋愛とを結び付けるのは。

Мария!

マリアよ！

моя любовь, надежда и вера

私の愛と希望と信仰は、

— это ты, милый.

それはあなたなのです。

Любимый мой!

愛しいあなた!

Но кто бы ни был над тобой,

誰があなたを支配しようとする構わない、

все равно ты мой!

あなたは私のものです!

Ах, Мария, я не властен над собой.

ああマリア、私は自分を支配できない。

Мария!

マリアよ!

——拍手喝采——

マリアは「愛と希望と信仰²⁷は、それはあなたなのです」とイエスの本質を十分に理解するものの、「でも誰があなたを支配しようとする構わない、あなたは私のものです」と最後は諦めきれない。

イエスとマグダラのマリアとは相思相愛だったのにこの世では結局結ばれないのか、とドラマであるにも拘わらず二人と神との間でいたたまらなさを感じて涙してしまった。それ以来、何度劇場に通ってもこの場面に来ると感動は繰り返される。

5. ユダの存在

キリスト教の伝統的な解釈では常に「裏切り者」²⁸の烙印を押されているイスカリオテのユダ (Judas Iscariot/ Иуда Искариот) であるが、『ジーザス・クライスト=スーパースター』においては逆に愛すべき存在である。ユダは人間として誰よりもイエスを熱烈に慕い、誰よりもイエスの「地上での」命を守ろうとした忠実で正直な弟子として描かれている。原作のニューヨーク版でもモスクワ版でもそのコンセプトは同じである。ただし俳優の存在感について比較すれば、モスクワのユダの方がはるかにスター性を持っていると言えよう。というのは、俳優がアクロバットを交えた激しいアクションを繰り返しながらも呼吸一つ乱さない鍛錬された身体を持ち、ロックの中でも重厚感に溢れるヘヴィメタルの歌唱法によって怒りや苦しみを破滅的なまでに表現しているからである。イエスとマグダラのマリアはオペラ歌手のように動きの少ない静的な演技を見せるが、それとコントラストをなすようにユダは身体と声を使ってダイナミックに演じる。

²⁷ I コリント 13:13。

²⁸ ユダの裏切りの具体的な行為は、祭司長に銀貨 30 枚でイエスを引き渡すことを密約し (マタイ 26:14-16/ マルコ 14:10-11/ ルカ 22:3-6)、「最後の晩餐 (the Last Supper/ Тайная Вечеря)」(マタイ 26:20-25/ マルコ 14:17-21/ ルカ 22:14, 21-23/ ヨハネ 13:18, 21-31) の後、イエスが祈っていたオリーブ山の麓に武装集団を案内し、接吻を合図にイエスを特定したこと (マタイ 26:47-49/ マルコ 14:43-47/ ルカ 22:47-49/ ヨハネ 18:2-6) である。

ユダの実直さが特に共感を呼ぶのが、「熱心党のシモン (Simon Zelotes/ Симон Зилот)」²⁹との対決場面においてである。ユダとは対極的な意味で熱血漢であるシモンは、群衆を扇動して反ローマ帝国の暴動を起こすのにイエスが好都合な革命のリーダーだと考える。そして「過ぎ越し」の祭 (Passover/ пасха)³⁰ にエルサレムに登る時³¹こそ大衆の熱狂を利用して革命を企てる絶好のチャンスだと言う。そこでユダは断固として立ちほだかる。

ユダ「イエスが説く柔和さとつつしみを理解できないのか」。

シモン「イエスの教えが何の役立つと言うのだ」。

ユダ「我々は革命集団ではない」。

シモン「何のための集団か。我々はみな抑圧されているではないか」。

ユダ「お前はイエスを十字架にかけろか」。

シモン「不幸な自由党員よ、座って奇跡を待つがよい」。(第1幕6場「忘却」より)

ユダにとってもシモンにとってもイエスは同じく「地上の」リーダーであり、二人とも、イエスの説く「天上の力」を獲得することの意味を理解しなかった。ただユダは、ローマ帝国に対する「政治的な」リーダーとしてではなく、この世で愛を説く「精神的な」リーダーとしてのイエスを慕い、イエスの右腕になって働き、イエスにはいつまでも生きて共にいて欲しいと願っていた。そしてイエスが自ら「過ぎ越し」の祭りに犠牲となり、すべての人のために十字架に掛かろうとしていること³²を察知すると、ユダはその「天上の」計画³³を阻止しようと命を懸けて奔走する。その結果、命を落とす。

シモン「大衆の怒りは頂点に達している。犠牲者が出ればローマの耳に届くだろう」。

ユダ「カヤファよ、アンナスよ、どうか助けて。私のせいでイエスは犠牲になるのか」。

²⁹「熱心党のシモン」という表現は、12弟子の紹介(マタイ 10:4/ マルコ 3:18/ ルカ 6:15/ 使徒行録 1:13)で述べられている。「熱心党」とは、経済的困窮を背景に反異邦人・反ローマの武装闘争を標榜した党であるが、実際にシモンが黨員であったかどうかは定かでない。

³⁰ イスラエル人がエジプトの奴隷であった時、子羊の血を門に塗っておくと、エジプトの初子を撃つヤハウエがイスラエル人の家を見分けてその上を災いが「過ぎ越し」た(出エジプト記 12:13, 21-27/ 申命記 16:1-8)という言い伝えに因む。神の奇跡によって解放された歴史を記憶し、ユダヤ民族のアイデンティティを確認するための祭り。

³¹ 律法によると、「過ぎ越し」祭には男子は皆、礼拝のためにエルサレムに上らなければならなかった(出エジプト記 23:14-17, 34:22-23/ 申命記 16:16)。

³² 旧約時代の「過ぎ越し」の祭りでは、子羊を犠牲にして災いが「過ぎ越し」たという解放の出来事を記念していた。イザヤ書の預言にあるとおり(イザヤ 53:10)、イエスは自身を捧げ犠牲となる行為によって人間の罪の代価を支払った。「過ぎ越し」の子羊がイスラエルの民を「奴隷状態から解放」した出来事の記念だとすれば、イエスの死は全ての民を「罪から解放」して自由を得させる出来事だとする。『新約聖書』の中でも生前のイエスを積極的に「子羊」になぞらえているのはヨハネの福音書である(ヨハネ 1:29, 36)。

³³ ヨハネ 13:1-4。

カヤファ「哀れなユダ、なぜ苦しむのだ。お前の偉業は世々に語り継がれる」。
アンナス「あとは群衆がイエスを十字架に付けるだけだ。我々に奇跡はいらない」。
ユダ「彼は神じゃない。一番の兄弟だ。どうしたら彼を取り返せる？どうやって謝ればいい？」
シモン「聖座はまだ空いている。お前が座ったらどうだ？」
ユダ「神よ、なぜ私を殺すのですか？なぜ私をこんな役に選んだのですか？私は永遠に呪われた存在となるでしょう。永遠に」。(第2幕8場「ユダの死」より)

ユダに関する限りは伝統的なキリスト教の解釈を横に置かざるを得ないのだが、モスクワ版におけるヒーローはどうみてもユダである。カーテンコールの際に受け取る花束はみた限り「ユダ」が一番多いので、筆者だけの過大評価ではないと思う。そもそも、ユダがなぜイエスを裏切ったかの理由は『新約聖書』からだけでは判断し難い。³⁴

現ローマ教皇ベネディクト16世は、ヴァチカンにおける水曜日恒例の一般謁見で2006年10月18日、「イスカリオテのユダ」について教会の教えを解説した。教皇は、「イエスはユダが自分を裏切ると知っていながら、なぜ彼を12人の使徒のひとりに選んだのか、なぜグループの会計係として全幅の信頼を寄せていたのか」という疑問を投げかけ、『新約聖書』におけるユダの裏切りに関する記述を紹介した上で、それでもユダの生き方はひとつの神秘だと述べた。そして「イエスは人々の自由を尊重する」こと、「イエスは人々の悔悛と回心を待っている。イエスは憐れみと赦しに満ちた方である」という教会の教えを示した。³⁵

モスクワ版の舞台を観ていると、好人物ユダの熱い血潮があまりに共感を誘うので、ひょっとしたら本当にユダこそ「犠牲者」だったのかもしれない、と想像を膨らませてしまう。

おわりに

最後に『ジーザス・クライスト=スーパースター』のニューヨーク版とモスクワ版とを比べて、プロットは同じなのに何がキリスト教の観点から違うのかを考えたい。

ニューヨーク版は、聖書の「史実」とされるストーリーをフィクションとして演出しているので、登場人物の目線は我々と同じ人間としてのものであり、彼らの台詞は極めて人間的である。

他方モスクワ版では伝統的なキリスト教色を前面に出していると既に論じたが、その特徴は、ひとつに3章で述べたとおり、原作には無いがキリスト教の真髄に触れる場面（「山

³⁴ 福音書にみられるユダがイエスを裏切った理由は、マタイはユダの金銭欲を挙げ(26:15)、ルカは「サタン」の業(22:3)、ヨハネも「悪魔」の力(13:2)によるとする。

³⁵ 2006年10月18日付の“Vatican Information Service – English”の記事 (http://www.vatican.va/news_services/press/vis/englindex.php#start)。

上の垂訓)を挿入していることや、また他の場面でも聖書の語句をもとのコンテクストを変えずに台詞に取り入れていることにみられる。聖人についてプロテスタントと異なる見解を持つ正教では、イエスの12門徒は「聖使徒」でありマグダラの聖マリアは「亜使徒」で、皆聖人である。³⁶ 彼ら諸聖人の台詞には聖書に記されているとおりの語句が所々に散りばめられている。それは2章で場面ごとのあらすじを述べる際に、キーポイントと思われる語句を挙げて『新約聖書』、ときには『旧約聖書』のその部分をできる限り脚注に示した。

新大陸入植以降のプロテスタント諸宗派の文化が多種多様なのに対して、正教の文化は教義と伝統に忠実であることを要求する。『ジーザス・クライスト=スーパースター』のモスクワ版は、「正教文化の伝統」と「ロシアの演劇流派の伝統」とを見事に結集させただけでなく、それを「ロックオペラ」で演じるという前例の無い実験を成功させたという点で史上まれな芸術作品だと言えるであろう。

ソ連崩壊後のロシアではますますロシア正教の伝統を重んじるようになり、この「正教的」ロックオペラは現在も世代を問わず人気を博している。モスクワ劇場ではシーズン中に毎月3回ほど上演されているが、初演から四半世紀以上も続いている今でも、劇場は毎回満席である。

³⁶ 牛丸康夫「正教会の聖人について」『曙光 長司祭牛丸康夫遺稿集』1995年、9頁。